

科学的エビデンスに基づく「スポーツの価値」の普及の在り方に関する委員会
(第24期・第7回) 議事要旨

1 日時 令和元年7月26日(金) 12:40~15:00

2 場所 日本学術会議 5-C(1) 会議室

3 出席者: 渡辺 美代子(委員長)、山口 香(副委員長)、高瀬 堅吉(幹事)、
田原 淳子(幹事)、川上 泰雄(ビデオ)、喜連川 優、福林 徹

参考人: 川原 貴(日本スポーツ協会スポーツ医科学委員会、元国立スポーツ科学センター)、熊谷 晋一郎(東京大学先端科学技術研究センター、東京大学バリアフリー支援室)

(欠席) 井野瀬 久美恵、遠藤 謙、神尾 陽子、酒折 文武、田嶋 幸三、
萩田 紀博、美濃 導彦、山極 壽一、來田 享子

(事務局) 中島 和

4 議事要旨

(1) 最新のスポーツデータに関する話題提供(川原参考人)

川原参考人より、資料「東京オリンピック記念体力測定」に基づき、話題提供が行われた。要旨は以下の通り。

- ・ 国際スポーツ医学連盟(FIMS)の提案を受けて、オリンピック選手の健康・体力を生涯にわたって追加調査している(2004年以降は、日本体育協会(現日本スポーツ協会)と国立スポーツ科学センターの共同研究として実施)。
- ・ 本報告の対象は、東京オリンピック代表選手380名(男性314、女性66)で、アンケート、体力測定、健康診断を4年毎に実施し、その推移を競技継続群(現役)と非継続群(引退)との比較や一般人の「日本人の体力標準値」(首都大学東京)と比較し、その傾向を明らかにしている。
- ・ 体力測定の結果は、次のようにまとめられる。東京オリンピック選手の運動・スポーツ実施率は、青年期から高齢期に至るまで一般人よりも高い傾向にある。筋力、瞬発力、敏捷性、柔軟性は、青年期における差が高齢期に至るまで維持される傾向にある。平衡性は、青年期から高齢期に至るまで一般人よりも低い傾向にある。全身持久性は、他の測定項目に比べて運動・スポーツ習慣の影響が大きい。現在の健康や体力への自信は、一般人よりも高い傾向にある。
- ・ 健康診断の結果は、次のようにまとめられる。年齢別全身骨密度では、男女とも(70歳台で)若い人と同等レベルを維持し、骨に負担のかかる競技実施者ほど高い。生活習慣病と有病率の関係では、男性選手に一般人よりも高尿酸血症・痛風が多い(激しい運動

をすると、尿酸が上がるので、筋肉量の多い人ほど痛風になりやすい傾向がある)。フレイル(虚弱)とサルコペニア(筋肉量減少)については、オリンピック選手に明らかに筋肉量が多い。歯科調査では、オリンピック選手良好な咀嚼機能を維持しており、運動習慣は、口腔状態をよくし、歯周病予防に効果があることが示唆されている。

- ・ 以上の結果から、1964年東京オリンピック参加選手は長生きであり、若い頃の運動経験が後々に好影響をもたらしていると言える。

本話題提供について意見交換が行われた。要旨は以下の通り。

- ・ このような調査を維持していくには、かなりの費用と労力がかかる。引退後の選手にも継続調査を実施していくために、オリンピアンズ協会でもフォローしていくことが検討されている。
- ・ Jリーグでは、登録したプロ選手について毎年調査を実施している。IOCもこうした調査に高い関心を持っている。
- ・ アスリートにとっては、4年に一度、調査・測定を行うと告知することが、モチベーションになるであろう。
- ・ 当時のオリンピック選手と現在の選手では、運動の開始年齢が異なると思われる。アスリートの運動量については、かつてよりも効率的に行われるようになってきていると思われる。
- ・ 調査では、運動のやり過ぎによる影響を見ようとしたところもあるが、そもそも怪我していない選手がオリンピックに出場できたという事実があるため、客観的な判断は難しい。
- ・ オリンピック選手は、一般人よりも基礎代謝が高いと言える。
- ・ 比較対象とした一般人の中には、運動実施者とそうでない人が含まれており、オリンピック選手と一般の運動実施者との比較は行うことができていない。

(2) 当事者研究に関する話題提供(熊谷参考人)

熊谷参考人より、資料「当事者視点でみたスポーツのリスクと価値」に基づき、話題提供が行われた。要旨は以下の通り。

- ・ 当事者研究という方法で、問題提起を行いたい。東京大学における共同創造(Co-production)の主な取組みでは、当事者を研究するのではなく、当事者が研究するというものである。その取組は、「環境整備」と「人的支援」に大別される。
- ・ 障害当事者の主張は、「適切なサポートで障害のある人も能力を発揮できる社会を実現すべき」と「能力の有無を超えて尊厳のある人生を歩む権利がある」の2点であり、どちらか一方でも欠けると問題である(アスリートの支援も同様)。前者の例として、情報技術を活用したブランドマラソン選手のサポートがある。
- ・ 熊谷参考人が主宰している研究会では、アスリート当事者の視点から、「能力主義的環境におけるスティグマとウェルビーイングに配慮したパフォーマンス向上」について研

究し、「アスリートが安全に弱さや困難を開示でき、共有される文化を拓げ」ることや、優先度の高い研究テーマや対策の提言を目指している。

- ・ オリンピック・パラリンピックの盛り上がりの陰で、当事者には「半分期待」「半分警戒」の気持ちがある。
- ・ 能力主義、優生思想との関係でスポーツを考える必要がある。元アスリートの中にも薬物等の依存症に陥っている者が多数存在する。
- ・ 金銭的なサポートを受けていることによる勝利へのプレッシャーや、パラリンピアンはアスリート以上に障がい者の代表としての期待も背負っているなど、アスリートは様々なプレッシャーとストレスに晒されている。
- ・ 「弱音をはけない」ことは、トラウマへの道につながる。
- ・ アスリートのキャリア支援をする必要がある。ユニディメンショナル・パーソン（unidimensional person；生まれた時からスポーツしかない人生を歩んでいる人）は、心理的クライシスが高い。すべての人が、同時に複数のキャリアを歩んでいるのが本来の人間の姿であり、早期からのデュアルキャリア、キャリアアトランジションが重要である。

本話題提供について意見交換が行われた。要旨は以下の通り。

- ・ スポーツでないところでも同じことが起きている。科学の世界でも、新聞記事はノーベル賞しか相手にしない。実際には、多様な人たちがかかわらないとできないことが多いにもかかわらず、誰が見てもすぐ判断できるものに目がいく。システムが評価されない。みんなでやることを評価することが難しい。
- ・ 障がい者内格差もある。アメリカでは、介助者が必要な障がい者は外に追いやられている。
- ・ 結局、自分で選択させるような Will を持たせるしかないのではないか。
- ・ 体罰は、陸上競技や水泳では少なく、対人競技やチームスポーツに多い。前者は自己ベストという見える目標があるが、後者は勝つことでしか評価されない。自分で Will を決めさせない文化がある。
- ・ インクルーシブのレベルを高めることと、努力を正當に評価するシステムをつくることができればいいのではないか。

（3） 次回の話題提供者について

今回は、e-スポーツについて取り上げることとし、喜連川委員に参考人を推薦していただく。そこでは、まず、e-スポーツをスポーツの範疇に含めるのかどうかを検討することから始めるべきである。また、外国では e-スポーツをどう扱っているのかについても知りたい。

障がい者は、日頃の運動量が少なく、現実世界ではスポーツを楽しめないことが多いので、e-スポーツはバーチャルリアリティの仮想空間でスポーツを楽しめるメリットがあると思う。

(4) 今後の活動について

- ・ 学術フォーラムの登壇者について、以下の検討がなされた。スポーツ庁からの登壇者については庁内での人選を依頼した。「ライフステージにおける『スポーツの価値』の普及」は、①を削除し、②と一本化して、福永氏に登壇を依頼することにした。
「『スポーツの価値の普及』－障がい者スポーツ－」の登壇者は、田中暢子氏に依頼することにした。
- ・ シンポジウム（暴力関連）については、山口副委員長、來田委員を中心に検討してもらうことになった。
- ・ 最終回となるまとめのシンポジウムには、熊谷氏に登壇していただくことになった。
- ・ 文部科学省からの諮問の「回答」と本委員会からの「提言」との関係について検討し、まず全体を俯瞰するしっかりとした「提言」を作成し、その中からピンポイントで要点を抽出したものを「回答」とすることにした。また、文部科学省には、「回答」に「提言」を添えて提出することとした。
- ・ フォーラムやシンポジウムのライブ配信を希望する声が寄せられていることから、具体的に可能性を検討することになった。

以上